

白拍子

その晩、清重の屋敷では、安珍を迎えての歓迎の宴が開かれた。

米、山芋、根菜、岩魚、テナガエビ、ズガニ、シカ、イノシシの肉、ザクロにアケビ、イタビの実……

この山の中では珍しいコンブや干しアワビ……山海の珍味が並んだ。

清重は、ドブロクを飲んで上機嫌だ。

「安珍殿！安珍殿！……」遠慮めさるな！どうせ、急がぬ旅でござろう。」

清重は、安珍の杯にドブロクを注ぐ……。

受ける安珍の顔も、やや赤くなっている。

「ずっと泊まっていかれればよい。ゆっくりしていかれよ……。」

「ありがとうございます……しかし、約束がありますので、そう長居するわけには……。」

「なにを気使いされておる……未来の舅に遠慮は無用じゃ……。」

どうやら、清姫を焚き付けているのは、ハッだけではないらしい……。

急に笛の音が響き渡った。

美しい白拍子が横笛を吹き鳴らしながら宴会の間に入って来る……。

どうやら、清重が酒宴の余興として呼んであったものらしい……。

安珍には、何という曲なのかはわからない。

しかし、その笛の腕前が見事な事だけはわかる。

白拍子の白い……少しふつくらとした指が、なめらかに、笛の穴を押さえる。

その指の動きに安珍は見とれた。

酒宴の喧噪が止んで、皆が、その笛の音に耳を澄ましている……。

白拍子は眼をつぶっている。

心の中に浮かぶ旋律を、そのままに奏でているらしい。

静かな……野を渡る風のような響きが、

室内に響き渡る。

笛の音が止んだ。

しかし、その余韻が、空気に、

こだましている……。

話はもちろん、咳払いする者さえいない……。

白拍子は、笛を袴に差すと、代わりに、扇を取り出した……。

